

関西自然保護機構 (KONC) 2012年大会ポスター発表要旨

滋賀県朽木の巨木トチノキ伐採と森林再生の可能性：KONC現地観察会報告

○前迫ゆり（大阪産大人間環境学研究科・関西自然保護機構）・今城克啓（滋賀県自然環境保全課）・青木繁（巨木と水源の郷をまもる会）・野間直彦（滋賀県立大学）・金子有子（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）・佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

トチノキは日本の温帯域の溪畔林を構成する主要樹種だが、良好な状態で残っている森林は少ない。琵琶湖水源域の固有なハプロタイプを持つトチノキ巨木林は貴重な存在であったが、2008～2010年に、胸高直径1m以上のトチノキの約3割にあたる約60本が業者に伐採されるといった事態が生じた。KONCでは伐採地の観察会を2011年10月15日に実施し、幹周7.2mという滋賀県下最大級のトチノキ、巨木イヌブナ、カツラ等の生育状況から、朽木の溪畔林の重要性を再確認した。その一方、材搬出後の大ギャップ下に残る根周り9mを越える伐根となぎ倒された森林の悲惨な光景を目の当たりにした。地元住民との意見交換会では、近年はシカにトチの実を大量に食べられ収穫ができなくなっていること、高齢化が進み次世代は山に無関心になりつつあること等今後の森林再生を考える上で貴重な話を伺うことができた。

猪名川と藻川における植物群落と攪乱との関係

植田久崇・前迫ゆり（大阪産業大学大学院人間環境学研究科）

河川植生は多様な生物群集を維持する上において重要な草地であるが、都市域においてはアレチウリ、オオブタクサといった外来植物の構成比率がきわめて高い。これは洪水のような自然攪乱の頻度が低いことによると考えられる。一方、中洲は河川管理においては流下阻害の対象とされているが、攪乱を受けやすい立地であるため、1年生外来種の定着率が低い傾向にある。発表では、流況の異なる2河川を対象に、低水敷と中洲の植生比較を行う。

奈良県明日香稲渕の棚田畦畔植生（予報）

岩口創志・前迫ゆり（大阪産業大学大学院人間環境学研究科）

奈良県明日香村稲渕の棚田は秋のヒガンバナで代表される棚田景観が美しく、日本の棚田百選にも選ばれている。この景観を支えている植生の多様性を明らかにすることを目的として調査を進めているところであり、予報として報告する。休耕田に成立しているサクラタデ群落や水辺のカラスビシャク、畦のアキノタムラソウ、ノビルなど、春から秋に成立する群落の入れ替わりが棚田景観と多様性を維持していると考えられる。

本山寺自然環境保全地域の保全のための取り組み

○常俊容子（大阪自然環境保全協会）・佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）・松井淳（奈本山寺（高槻市）のモミ・ツガ・アカガシ林は、その学術的な価値より昭和53年「大阪府自然環境保全地域」「特別保護林特別地区」に指定されているが、近年のシカ密度の増加、林床植生の変化、乾燥化、林地の崩落、周辺域で拡大しているカシノナガキクイムシによる被害などで、生態系の劣化と森林の更新が危ぶまれている。「本山寺自然環境保全地域を考える協議会」2年目の活動成果を踏まえ、今後の課題について考える。

記録からみるカエシタケの分布と生態

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

カエシタケ *Hypocrea cornu-damae* Pat. (*Podostroma cornu-damae* の学名はシノニム) は強い毒性を持つこととして知られ、近年の発生拡大が報道されるが、その分布や生態には不明な点も多い。菌類関係者や標本情報から集めた情報をもとに発生状況の変遷と生態を示す。

都市域に造られたビオトープ池における水生動物群集の初期遷移

○石井 実・平賀耕介・山田竜平・秋田耕佑・平井規央（大阪府大・生環）

大阪府の都市域に造られたビオトープ池において、水生動物群集の成立過程を明らかにするために2年間調査を行った。また比較のために、近隣の河川ワンドや学校プールでも水生動物群集の調査を行った。ビオトープ池の水生動物群集の種数と個体数はともに増加し、種多様度も造成時から徐々に高くなった。また、種構成も変化し、2年目には近隣の学校プールとの共通種が減少し、近隣の河川ワンドとの共通種が増加した。

淀川水系における大型鰓脚類の分布とその要求環境 - 市民参加型調査の結果から

○石田 惣・淀川水系調査グループプロジェクトYカブトエビ班（大阪市立自然史博物館）

2007～10年に淀川水系の水田で大型鰓脚類（ホウネンエビ、カイエビ類、カブトエビ類）の分布と生息環境調査を市民参加により行った。その結果、多くの種で標高が生息確率を説明する変数だったほか、いくつかの種で導水方法（バルブ導水または自然落水）が生息に影響していた。一方、畔の護岸度は生息確率を説明する変数ではなかった。導水バルブの有無は、他の水田との接続や捕食者の密度、土壌の乾湿度等と関係するのかもしれない。

有田川・古座川・宮川における大型甲殻類の種組成と流程分布の比較

○浜崎健児・山田 誠・青木美鈴・熊木雅代・遊佐陽一・保 智己・和田恵次（奈良女子大学・共生科学研究センター）

河川生物群集は、周辺土地利用や河川形態など流域環境の影響を受けるが、複数河川を対象にその関連性を詳細に評価した研究はほとんどない。奈良女子大学共生科学研究センターは、大型甲殻類など河川生物の生息と流域環境との関連性を評価するため、紀伊半島の8河川を対象にプロジェクト研究を進めている。本発表ではその概要を示すとともに、昨年、有田川・古座川・宮川で調査した大型甲殻類の種組成と流程分布の結果を報告する。

淀川におけるイシガイの生態、特に稚貝について

○木邑聡美・唐沢恒夫・岡崎一成（イシガイ研究会）・石田 惣（大阪市立自然史博物館）

タナゴ科魚類の産卵母貝となるイシガイの成貝は淀川の各地で確認されるが、稚貝の確認例は少なく、その生態的知見は不足している。一方、ワンド域では近年の外来魚の優占がイシガイ幼生の成長・生残に負の影響を持つとされ、稚貝の減少が危惧されることから、その生息環境や個体群動態の把握が急務である。昨年秋、発表者は本流域でイシガイの稚貝を確認した。その出現状況及び生息環境の調査経過を報告する。

大阪府八尾市のため池群におけるバラタナゴ類の生息状況

○高森亮佑・田口峻一（大阪産大人間環境）・加納義彦（NPO高安研究会）・鶴田哲也（大阪産大人間環境）

ニッポンバラタナゴは、生息環境の悪化や外来亜種との交雑により絶滅が危惧されている。本研究では、大阪府八尾市においてバラタナゴ類の生息状況と交雑の程度を調査した。調査した138地点のため池うち、9地点でバラタナゴ類が採集された。そのうち、ニッポンバラタナゴ集団と考えられるのは3地点のみであった。また、現在バラタナゴ類が生息しているほとんどのため池では、適切な管理が行われておらず環境が悪化していた。

イタセンパラ保全の取り組み

上原一彦（大阪府環境農林水産総合研究所・水生生物センター）

淀川のシンボルフィッシュで天然記念物のイタセンパラは、現在、野生絶滅に近い状態に陥っている。当研究所では、所内で生息域外保存を行なうとともに、国土交通省・淀川河川事務所と共同で、淀川への野生復帰に取り組んでいる。また、昨年8月には「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク（イタセンネット）」を設立し、市民団体や大学、企業、行政などの連携により、野生復帰支援に向けた取り組みを展開している。

大阪府内のメダカの遺伝的多様性と外来ハプロタイプによる攪乱状況

○鳥居美宏・平井規央・石井 実（大阪府大・生環）

メダカ *Oryzias latipes* は地域ごとにさまざまな遺伝的分化が生じていることが知られており、放流による遺伝的な攪乱が問題となっている。本研究では大阪府の野外で採集された本種とペットショップで購入した個体の遺伝子解析を行い、本種の遺伝的な攪乱の現状を明らかにした。

コガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方

関根幹夫（大阪市立自然史博物館友の会会員）

民族昆虫学の観点からコガネグモ相撲における横棒土俵の扱い方について考察した。加治木では横棒土俵をたて棒に取り付ける。中村では、横棒の扱い方が変化した。加治木の技法は、熊本市と和歌山に伝播した。大瀬戸町では、手で持った横棒を傾けてクモの闘いを促す。上方に向かって歩くクモの習性に基づく方法でクモ相撲の原型と思われる。加治木では、クモの脚に砂をかけて闘いを促す新たな工夫が創造され、遊びの質を高めてきた。

大阪湾岸のカモメ類の分布の季節変化

和田 岳（大阪市立自然史博物館）

2010年9月より毎月1回、大阪湾岸40ヶ所で水鳥調査を実施している。今回は2011年8月までの一年分のデータを用い、カモメ類の個体数の変化について報告する。北東部（湾奥部）では、冬はユリカモメ・カモメが多く、夏に多いウミネコは冬になるとほとんど姿を消す。一方、南西部（湾口部）では、一年中ウミネコが見られ、冬はオオセグロカモメ目立つ。イカナゴ漁が盛んな明石海峡周辺では、イカナゴ漁が行われる3月に多くのユリカモメが集結した。

大阪湾岸のカモメ類の分布 約10年前との比較

大阪鳥類研究グループ・○和田 岳（大阪市立自然史博物館）

2000年度（2000年12月～2001年2月）に大阪湾岸92ヶ所で、カモメ類の分布調査を実施した。それから約10年後の2011年度（2011年12月～2012年1月）に同じ場所で同様の調査を行ったので、その結果を報告する。2000年度には、100羽以上のカモメ類が集まる場所が2ヶ所あったが、今回は1000羽以上のカモメ類が集結する場所は記録されず、全体的にカモメ類の減少傾向が認められた。

吉野川河口におけるヨシ群落の衰退とオオヨシキリの営巣環境の変化

○長谷川匡弘（大阪市立自然史博物館）・松井理恵（パシフィックコンサルタンツ株式会社）・鎌田磨人（徳島大学工学部）

オオヨシキリはヨシ原等に営巣する夏鳥であり、吉野川河口域に広がるヨシ原でも多くの営巣が確認されている。平成19年以降、その営巣環境がヨシ群落から、アイアシ群落中心にシフトする現象が確認された。同時期にヨシ群落の衰退も確認され、これら二つの関連性が示唆された。本発表では、吉野川河口におけるヨシ群落、アイアシ群落等の経年的な変化とオオヨシキリの営巣環境について解析を行い、その関連性について考察する。

生物の生息環境の保全と回復へ向けて –大阪生物多様性保全ネットワークが目指すこと–

道盛正樹（NPO法人大阪自然史センター）

大阪には、自然の市民研究者の足跡があるが、行政・市民・学術機関との連携は浅く、貴重な情報が埋もれ、各地の情報を財産として利活用する仕組みが課題である。大阪自然史センターでは、「大阪自然史フェスティバル」を開催し、自然の普及啓発を通じて、生物多様性の理解、生息環境の保全と回復へ、研究者との連携も整えてきた。その実績を活かし、教育機関・学術機関・NPO・行政・地域でこれらの課題に対応する機関として「大阪生物多様性保全ネットワーク」を組織する。